

## 本学会がコミットする「福音主義」に関する研究への一つの“あと書き”(a postscript)』

宇田進

### はじめに

突然、本学会誌の「四十周年記念号」への寄稿を依頼され、かなりの躊躇(自らの非力さを痛感しつつ)を覚えながらここに拙文を綴らせて頂いた次第である。

それから挙げたテーマに入る前に、次の二点を記すことをまずお許し頂きたい。中国のことわざの一つに「井戸を掘った人にたちを忘れるな!」というのがある。私事にわたり恐縮であるが、聖書の影響を受け、戦争に反対して北海道の開拓地の医師として赴任した義父の歩みを通して、北海道開拓民の苦闘の歴史に目を向けさせられてきたが、近年、そのことと重なり合ってこのことわざがよく頭に浮かんで来る。このこととの関連で申し上げたいことは、本学会の会員はもちろんのこと、本誌の読者の方々は、この機会に本誌第一号(1970年刊)に掲載されている矢内昭二初代理事長の「発刊の辞」と村瀬俊夫「神の摂理のうちに誕生した日本福音主義神学会」に是非目を向けて頂きたいということである(かつて応援のために来日して下さったアメリカ福音派の代表的神学者の一人、Carl Henry が編集者[発刊者でもある]を務めていた *Christianity Today* 誌の1971年4月9日号に、本学会の設立が記事となっている。海外での“初紹介”である!神学会訳篇で、『キリスト者の社会的責任——福音主義の社会倫理』1980年刊行——筆者の「後記」で福音派の近況紹介)。もう一点は、本学会の設立時とほぼ同時期に起った“福音主義”を主テーマとした福音派系の研究誌の出版という試みである。これは全くの開拓的な試みであった

が、若輩の筆者が編集者を命ぜられ、小峯書店の協力を頂き、1967年に『現代における聖書』をテーマに第一集の出版の日の目を見るに至った。これには、“福音主義”は日本のキリスト教界において中心的な神学的・教会的課題であるという共通認識を抱いていた岡田稔、名尾耕作、大村晴雄、山口昇、安田吉三郎、増田誉雄の論文や、有賀寿、常葉謙二、田辺滋、泥谷逸郎の書評などが集録されている(筆者の拙論「実存論的神学の啓示観」も含まれている)。第二集は“神”特集を計画し、小林和夫、渡辺公平、松田一男、藤巻充、春名純人の論文を予定していたが、結果的には本神学会の創設に合流する形となった。また、創立年に出版された竹森満佐一編『イエス伝研究をめぐって』には、本学会関係者(山口昇、藤井重顕、舟喜順一、増田誉雄、筆者)による一章“保守的学者の立場から”が含まれている。関連資料として、ここにY. Kumazawa & D. Swain, ed.: *Christianity in Japan, 1971-90* (1991)に筆者による一章“International Evangelicalism”が含まれていることと、1974年に京都で開催された第一回日本伝道会議(多くの神学会関係者が奉仕——筆者も「今日における救い」と題する発題講演を担当)の『日本をキリストへ——講演集』、1974とを付記させて頂く。

さて、今回は本学会名の核心部分を成している“福音主義”(evangelicalism)について、特に二面から拙論を述べさせて頂くこととした。そもそもこの「福音主義」は、佐藤敏夫によると「日本初期プロテスタント神学の傾向を総括する概念」(『キリスト教神学概論』1994)であると言われ、石原謙は「日本基督教団の成立とその進展」(『日本キリスト教史論』1968)の中で、「福音主義的ないし聖書主義的態度が著しい」と指摘している(以上二件について詳しくは拙著『総説現代福音主義神学』2005、423頁以下参照)。また、最近の神学教育の現場においても「伝道する福音主義的公同教会への飛躍」ということが力説されている(『東京神学大学報』、No. 205、1999年7月7日)。個人的なことになるが、この“福音主義”という視点・立場は、“リベラル派”とか“エキュメニカル派”と呼ばれてきた教会の出身である筆者(最初に手にした神学書は桑田秀延『基督教概論』1941であった。)にとって、“神学上”、そして“信仰実存的”にも今日まで根本的な問題かつ課題であり続けてきた。

本稿では、近年、意外にも大きな話題となった“キリスト教原理主義”をめ

ぐる論議との関連において、もう一点は古屋安雄が『日本のキリスト教』(2003)の中で提唱しておられる「第三の道」との関連において、“福音主義”について幾分か考えてみたいと思っている。

## I 近年の「キリスト教原理主義」論議をめぐって

このところ日本のキリスト教界において、また一般のマスコミにおいても、「原理主義」ということが“今の”話題となり、いろいろと論議されてきた。「キリスト教原理主義」とか、「イスラム原理主義」は、よく耳にする昨今である(筆者は2005年度後期に慶応大学に招かれ「キリスト教原理主義」を講義)。さらに、最近の文書(例・W. フート『原理主義—確かさへの逃避』邦訳2002)では、「ユダヤ教原理主義」(例・宗教シオニズムの過激派)をはじめ、「カトリック原理主義」(例・法王ヨハネ・パウロ二世が後押ししている「オプス・デイ」と呼ばれている復古主義運動や第一バチカン公会議の教規と教令を重視する「デンツィンガー神学」と呼ばれている運動。第二バチカン公会議と新しい神学的動向については、会議に招かれたG. C. Berkouwerによる*The Second Vatican Council and the New Catholicism*, 1965が有益である。“新傾向”について『福音ジャーナル』誌1966年9、10、11月号所収の拙文「ローマ・カトリック教会のゆくえ」参照。)や「ギリシャ正教原理主義」のような「原理主義」も取りあげられている。

今、オウム裁判が進行中だが、宗教学者の島田裕己は、『宗教の時代とはなんだったのか』(1997)の中で、オウムのテロリズムを仏教の「原理主義」と位置付けている。以上のように、今日、「原理主義」という“ラベル”が実に広範囲に使われている事実、むしろ驚きを感じる!

まず、ここでは、日本のキリスト教史、特にその神学思想史の面からは従来“異物”扱いされてきた“キリスト教原理主義”に少々注目しながら課題となっている“福音主義”について幾分か考えたいわけであるが、そもそもこの名称は英語の「ファンダメンタリズム」(Fundamentalism)に対する“最近”の訳語である。それまでは、長い間「根本主義」が広く使われてきた。「根本主義」の最も古い用例を、日本プロテスタントの黎明期の指導者植村正久の『宣言若

しくは信条』,1924 の中に見出すのである。より最近のカトリック系のハロラン・美美子による『アメリカ精神の源』,1991 も同様である。ストレートに「ファンダメンタリズム」を用いるケースもある。激的な酷評で知られるジェームズ・バー『ファンダメンタリズム—その聖書解釈と教理』(邦訳 1982) がその例である(バーは福音派の出身である。筆者は一度米国でお会いしている)。また、以下で見るように時には“福音派”や“福音主義”と交換可能なものとも見られている。

さて、シカゴ大学でキリスト教近・現代史を担当してきたマーティン・マーティは、『アメリカ教会の現実と使命—プロテスタント主流派・福音派・カトリック』(邦訳 1990) の中で、「その繁栄が福音派を或る種の新しい主流にした」(35 頁) と指摘した上で、次のような状況を紹介している。たとえば、「このところの福音主義の繁栄は、興奮に飢えた反理性的な世界を餌食にしている癌の症状に過ぎない。」(43 頁) とか、「福音主義は化粧したファンダメンタリズム以外の何物でもなく、まさしく宣伝のための見せ掛けなのである。」(同頁)、といった見方や声が多く聞かれると述べている。だがしかし、マーティは「すべての福音主義者を一つの型に押し込み…福音主義キリスト教の豊かさを正当に取り扱っていない」と指摘しながら、プロテスタント主流派と福音派(筆者注・アメリカ人口の 25%—4 千万人から 5 千万人)とカトリックの“共生”(シンピオテース)ということを中心とした「公共宗教」(*The Public Church: Mainline—Evangelical—Catholic*, 1989—その中心は市民的・社会的・政治的領域における「共同善」と「公民の義」とを形成することを目的とする)の必要性を強く訴えている。Robert Wuthnow (プリンストン大学社会学教授): *The Struggle for America's Soul—Evangelicals, Liberals, and Secularism*, 1989 も類似した視点の重要性を説いている。

一方、目を日本に向けると、マーティが言及した批判的見解とほぼ類似した声が寄せられてきた。まず、かの熊野義孝は、“神学上の反動形成の代名詞”と分析している(『基督教概論』, 1947)。最近のケースとして次の二例を掲げることができよう。一つは同志社大学の森孝一のケースであり、もう一件は関西学院大学の栗林輝夫のケースである。

森の基本的立場は、『讀賣新聞』(2004 年 2 月 18 日)の「宗教を考えるシリ

ーズ」の中で、神学部の中に新しく設立された「一神教学際センター」との関連で登場する。森によると、十字軍や植民地支配などを巡り、欧米、中東の一神教の国々には歴史のしがらみがある。日本はそのいずれからも外にあり、三つの一神教(キリスト教・ユダヤ教・イスラム教)の「仲介者」として、役割を果たせないか。つまり、ただ、「多神教=平和的・共存の」、「一神教=戦闘的・独善的」という図式を描いて、「多神教こそが一神教文明に対する解決策」と安易に発想することは避けると言う。一神教世界の人々に一神教はダメだからやめなさいというのは、「あなたのお母さんはダメだから替えなさい」というのと同じ。そう言わずに対話の場を提供し、彼らの伝統の中から平和共存の道を探求したいということである。

その際に、避けられないのが「原理主義」の問題とその克服であると見ている。神を絶対的に信頼し、人間が作ったものとしての「宗教」を含め、神以外のすべての事柄の相対化が必須とみる。ところが、原理主義者の特徴は、真理がすでに分かっている、聖典にすべて書かれていると思ひ込むことだということ。そうならないためには、自分がこれまでに受け入れてきた教えを自分で一度相対化し、真理は簡単に得られないと思ひ直す勇気が求められる。また信仰の異なる他者との出会いの中で、社会がいかに「礼節」を育てるかも重要となるだろう、ということである。克服の一つの要とも言えるものとして大貫隆(東京大学)が『イエスと経験』, 2003 において表明したイエス論も重視されている。それによると、イエスは「神は言われる」という言い方はしなかった。神の権威を持ち出さず、「私は言う」と「自分の名前と責任で語った」と指摘し、“神の名の下に”戦いを仕掛けるという生き方に疑問を投げかけた、ということである。

森は、かつて「アメリカにおけるファンダメンタリズムの歴史」(『基督教研究』第 46 巻第 2 号, 1985)の中で日本の状況に触れて次のようにも論じている。

「日本におけるファンダメンタリストは今日のアムリカの場合と異なり、きわめてセクト的色彩が強い。日本におけるファンダメンタリスト・グループによる出版はほとんど日本のキリスト教界の目にふれることがない。それらの出版物の影響力は彼らのグループ内に限定されているので、ここではとり上げない。いわゆるキリスト教界の一般的読者が手にすることができるものとしては、ま

ず前掲のジェームズ・バーの『ファンダメンタリズム：その聖書解釈と教理』(『本のひろば』誌、1982年4月号に東京神学大学の熊沢義宣教授と筆者の「対談書評」が掲載されている)の翻訳を上げることができるだろう(195頁)と。

このような“セクト”発言(「セクト」[sect]は多く“異端分派”の意味に受け取られている)に接した時に、筆者の脳裏に半ば反射的に浮かんだのが、アメリカの小説家シンクレア・ルイスの作品『エルマー・ガントリー』、1927(邦訳1960)であった。これは1920年代の社会の混乱に乗じて暗躍したとされる牧師を描き、教会に対する不満と嫌悪を扱ったものである。歴史的には“odium theologicum”(神学嫌悪)というラテン語で表現されてきたことと言えよう。また、「一神教学際センター」設立に関する主旨からは、キリスト教を一般宗教史のうちに取り込み、“歴史とともになる”キリスト教の弁証を試みたかのエルンスト・トレルチの歴史的相対主義のエコーや、ジョン・ヒックの宗教多元主義への共鳴音が響いてくるように思われる(拙著『総説現代福音主義神学』、2005、318頁以下参照)。

次に、栗林の見解は、『ブッシュの“神”と“神の国”アメリカ』、2003と『キリスト教帝国アメリカ』、2005の中で表明されている。その主張の中心はと言うと、アメリカの政治は今や「一握りのプロテスタント狂信主義者の手に握られてしまった」。「ブッシュ政権を理解するためには、福音派の主だった教義を知っていなければならない」。その神学は「粗雑で、危険な、反知性的な国家護持の神学」である、とまず総括的に批判する。

具体的には、聖書を誤りのない啓示の書とする、長くピューリタンたちによって保持されてきた神の選びと主権を強調するカルヴァン主義神学、神の国の“今”と“キリストの法”という視点に立つ文化・社会・政治のキリスト教的再建運動(筆者の同窓の友人の一人 Gary North などによる“Dominion Theology”を主軸とする“Christian Reconstruction”運動のことと思われる。ノースの著作は、*Crossed Fingers—How the Liberals Captured the Presbyterian Church*, 1996など四十点近くにのぼる。邦訳には『カルヴァンはセオノミストだったか』1993などがある)、進化論に反対する創造主義(“Creation-Science 運動”や“Intelligent Design”論のことであろうか。ギャラップ調査などによると、アメリカ人の25%が創造論者。)、反イスラム十

字軍主義、親イスラエル・ハルマゲドンの世界戦争・キリストの再臨を強調しつつ黙示録的メシア主義を特色とするディスペンセーション主義(ハル・リンゼイやティム・ラヘイ『レフトビハインド』一邦訳、2002などのことか。筆者は“聖約期分割主義”という訳語で表記)、分離主義、ビリー・グラハムの影響(今日までに実に二十億の人々に福音を伝え、1974年には「ローザンヌ世界伝道会議」[不肖筆者もグラハム師より全体会議の講師に招かれた]を主催。会議で採択された「ローザンヌ誓約」は世界の福音派の特に“福音宣教”上の重要指針となった。J. ストット(筆者訳・宣教学の開拓的推進者古山洋右氏の「推薦のことば付」『現代の福音的信仰—ローザンヌ誓約』邦訳1989参照。会議の全資料はJ. D. Douglas, ed.: *Let The Earth Hear His Voice*, 1975として出版されている。筆者の講演“Biblical Authority and Evangelism”も79頁以下に収録)などが、批判的かつ拒否的にふれられている。

以上のような見方と相通じる見方は、昨今のマス・コミの世界にも種々登場してきている。その一例が小学館の『Sapio(サピオ)』誌で、2005年3月23日は、「世界を揺るがす宗教“原理主義”の正体」という表紙のもとに越智道雄(明治大学教授、中公新書『ワスプ(WASP)—アメリカン・エリートはどうつくられるか』、1998の著者)による「世界帝国アメリカに埋め込まれた“キリスト教原理主義”という名の“災厄”」と題する批判的記事をもって、その問題性をアピールしている。以上のような声を耳にするたびに「今日、自分は原理主義の反対者だと言えば、社会において広範な賛助を得るだろう」というヴェルナー・フートの言葉(『原理主義—確かさへの逃避』邦訳2002、42頁)が、ふと頭に浮かんでくる。ところで、アメリカの市民宗教に詳しいリチャード・ピラードとロバート・リンダーは、『アメリカの市民宗教と大統領』(邦訳2003)の中で、現代のマスコミに触れ、福音派の神学をはじめ、その歴史と今日の実状(“草の根保守”)に関する彼らの認識と検討が“きわめて浅い”と批判している!

ここで、栗林が批判したブッシュ前大統領とキリスト教との関係について、各論的批判もさることながら、ブッシュの立場の“柱”となっている次の四点(従来日本において適格に取り扱われてこなかった)を要点のみであるがここで確認しておきたい。①植民地初期の指導者ジョン・ウィンスロップの「丘の上に